

e安息日—アンプラグせよ、現代人！

小原克博



奨励者紹介〔こはら・かつひろ〕

同志社大学一神教学際研究センター長

同志社大学神学部教授

〔研究テーマ〕キリスト教思想、宗教倫理学、  
一神教研究

安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである。

(出エジプト記 二〇章八—一節)

今年度最後のチャペル・アワーですが、今日は「e安息日」というタイトルをつけました。最初に、このタイトルをキリスト教文化センターに送ったとき、「このeは取っついていすよね」と確認されて「いやいや、このeが大事なんです、残しておいてください」とお返事いたしました。このタイトルだけで私が今日、何を言おうとしているのか、おわかりいただける方には大体察していただけたかと思えます。秋学期の統一テーマが「あなたはどこにいるのか」ということで、再確認したわけですが、今日語りたと思うことは、まさにこのテーマとも深く関係してきます。あなたはどこにいるのか、私たちはどこにいるのだろうかというのを、「安息日」を通じて考えてみたいと思います。

## 安息日の起源

現代の問題について考えていきたいと思いますが、まずは、旧約聖書「出エジプト記」から読んでいただきました箇所を、もう一度、確認したいと思います。「出エジプト記」という書物は旧約聖書のなかでも重要な書物の一つです。最初の五巻はモーセ五書と言われていますが、「創世記」に続き「出エジプト記」には、エジプトで苦役するイスラエルの民を、神によって選ばれたモーセがエジプトから乳と蜜の流れる地・カナンへと導きだす、そういう物語の序章部分が描かれているわけです。

そして今日の箇所となっている二〇章は、そのなかでもピークとなる、シナイ山でモーセが十戒を与えられ、それを記した部分であります。十戒の一つひとつの戒めは、ここに書かれている通り、ユダヤ教、イスラエルの伝統を越えて、後にキリスト教にも重要な戒めとして受け継がれてまいりました。そのなかでも、今日は、「安息日」について考えてみたいと思います。安息日の規定は、歴史的なことを振り返ると、非常に古い起源をもっていることがわかります。そもそも、十戒のなかの安息日規定というのは、「創世記」の創造物語を前提にしているわけです。一章から二章にかけて天地創造の物語があり、第一日目から第六日目まで神が創造の業をなされて、第七日目に休まれたように、あなた方もその日を休みなさいという命令なのです。休むというと、今日では労働的な視点から、働

いてばかりだと身体を壊すから休みなさいという観点でとらえることが多いのですが、この文脈では、必ずしもそういう意味ではありません。極めて宗教的な意味で、この時代も今の時代とさほど変わらず、人びとは働き続けなければならなかったわけです。特に、生きていくためには働き続けなければならなかったわけですが、そういうなかでしばしば古代のイスラエルの人たちも、一体、神がどこにいるのかも忘れてしまうわけです。あなたはどこにいるのか。結果的に神と自分との位置関係がわからなくなってしまう。六日間働いたならば、一日、特別な日を定めてその日は一切仕事をすするな、と一切の仕事から解放されて、あなたたちの生活がどうなのか、そもそも生活のすべてが、誰に与えられ、誰によつて守られてきたのかを一度味わい知りなさいという意味が、安息日のなかにはあります。「主を知る」、一言でいうならば、そのことのために聖別された日であるとまとめていかと思います。

その点では安息日の規定というのは、この時代、そして後に新約聖書が書かれる時代、イエスが活躍された時代にも「安息日」という言葉が聖書の中に繰り返し出てくることからわかりますように、単に古代において通用したルールではなく、モーセの時代からイエスの時代を経て、さらに現代にまで受け継がれている重要な規定であるということがわ

かります。

特に聖書の文脈のなかで、安息日は「出エジプト」という脱出劇と比べてもよいくらいにドラマティックなメッセージを含んでいると思います。「出エジプト」という出来事がある意味でイスラエルがエジプトという空間に束縛され、束縛された場から自由な地へと解放されていくような空間的な脱出劇であったとするならば、安息日の呼びかけというのは、時間的な解放を呼びかけていると言つてよいと思います。聖書は、私たちがある特定の場所に縛られることから解放されるという空間的な解放と同時に、時間によって縛られてしまうことの不自由さ、それによって自分の居場所を失ってしまうことの問題を指摘しています。そして「安息日」は、そういう束縛から解放する時間的な解放という重要な側面をもっていると言つてよいでしょう。私たちはその意味で「出エジプト」と並んで、この「安息日」の重要性を味わっていく歴史的な素材を、ここに見いだすことができます。

## 休日の起源と現状

現代の私たちは、たとえば土曜日・日曜日が休みだったり、国民の休日があったりというように、休みというものはあると考えがちですが、これは、少なくとも日本においては、それほど長い歴史をもつてはいません。具

体的に言いますと、少なくとも江戸時代までは一般の庶民が休むことができたのは、お正月とお盆くらいなのです。そもそも休みの感覚がありません。お正月とお盆はお暇をいただいて、自分のしたいことをしたり、故郷に帰省したりということが許されましたけれども、それ以外は基本的に働き詰めです。休みの日は保障されていませんし、その観念すら存在していません。休むことを知らなかった社会、休むことを許されていなかった社会と言つてよいでしょう。それが明治の開国以来、少しずつ変わってきました。開国以降、日本は近代国家としての体裁を整えることに邁進していくわけですが、当時の日本はとにかく欧米列強と伍していかなければならないという、焦りに似た気持ちをもっていたわけです。近代化をどうしたらいいか、はつきりとわかつていたわけではありませんので、さまざまに欧米の知識人から学んでいったわけです。明治初期の日本には在留外国人たちがいました、そのなかにはキリスト教の宣教師もいました。その宣教師の一人にフルベッキという人がいたのですが、彼は日本にきた当初、英語の教師として働きながら、徐々に人脈を広げていきました。後には明治政府の顧問のような役割を果たしていきます。つまり、日本はこういう国づくりをしたらいいのではないかと、政府に提言できるようなポジションに、彼はいたわけです。日曜日を休日とした方がいい、それが日本の近代化には役に立つ

と提言したのは、おそらくフルベッキであろうと言われています。

宣教師フルベッキは、西洋のキリスト教社会では一般化していた日曜日を休日として導入することが、日本の近代化にとっても重要であると考えたわけです。当時の日本人にとって、この考え方は新しいというか、信じ難いというか、最初は受け止め難かったようです。すぐには全体に導入できませんでしたが、まずは町役場・学校から導入が始まっていきました。少しずつ休みの習慣を広げていって、後に日曜日が定められ、現代に近い形で休日 が定められることになりました。ただ現代の日本をみても、本当に休みが十分に機能しているかどうかは、しばしば問題になっています。多くのヨーロッパ諸国では、きちんとした休みの保障、平均四週間に及ぶ長期休暇が保障されていますが、日本はまだそこには及びません。ドイツやオーストリアでは、閉店法によって土曜日と日曜日の商売は原則的に今も禁止されているわけです。休むということへの並々ならぬこだわりが、未だにヨーロッパのなかには伝統として息づいています。

### 電子的な網の目の中で

こういう休日、休みの起源となってきたのが、今、お話しした安息日という言葉です。「神が命じられたのだから休みなさい」。

これ以上わかりやすい説明はありません。人間的な理由ではなく、神のことをおぼえよ、という特別な日であったわけですから。こういう安息日によって、古代世界の人びとも休むということの重要性を教えられていたわけですから。モーセの時代、聖書が書かれた時代と比べるならば、私たちの時代は、はるかに多くの自由、自由な時間をもっていると言つてよいでしょう。日々の糧を得るために額に汗して、日々働かなければならないということは、私たちの生活からはだんだんと離れていっています。そういうことは分業して、私たちは、より多くの自由を享受できる時代にいます。しかし現代においてはまた考えなければならぬ、古代世界にはなかった別の問題が、さまざまな形で生じてきています。私は授業で生命倫理の話などをするときに、現代医療・終末期医療の問題について教えることがあります。医療現場の実態は基本的には延命です。さまざまな手段を尽くして、人の命を、わずかでも延ばすということに至上課題が置かれていますから、結果的にチューブをたくさんつけていかざるを得ないのでありますが、そういう状況や問題性を話す機会があります。多くの学生が「私の場合は、そういうことまでして長生きしたくない、尊厳死を選びたい」という意見を返してくれます。確かにそうです。私たちは、たくさんのチューブをつけたまま生きることが望ましいのかどうかについては、いろいろ考えさせられます。ところが



よくよく考えてみると、そのように疑問を呈する現代の若い人たちであったとしても、見えないチューブに身体中、縛りつけられているのではないかと時々、感じることはありません。携帯電話・パソコン・iPod・iPad、その他の電子機器が周りにあるのですが、身体的なチューブを拒否したとしても、電子的なチューブが私たちの精神の至るところに繋がれていて、その一つでもプツンと切断されると、いてもたってもいられなくなる。そのような状況にあるのではないかということです。たとえば、多くの方が日常身につけている携帯電話が故障したりなくなったりします。せっかくだから一カ月くらい我慢してみてくださいと言われたら、精神的にかなりの不安定を来す可能性があります。

携帯電話やゲーム機器、そういうものによって、私たちは自分を支えられているという側面があるわけです。電子機器によって繋がれている私たちの生活を、どう考えていったらよいのだろうかという今日の課題、モーセが思いも及ばなかったその課題を私たちは受け止めながら、同時に安息日というテーマのなかでその課題を見てみたいと思います。

つまり私たちは、一旦そういう機器を持ちだすと、立ち止まらなければならぬところですから、立ち止まらなくなる。休めなくなっているところがあります。コンピュータを含むIT機器は、本来、人間を不必要な労働から解放し、効率を上げて、できるだけ自由時

間を生み出すために開発されたものですが、それが社会全体に普及していくや否や、二十四時間どこでも働けるという状況を生み出してしまいました。昨年一年間、アメリカにいましたけれど、仕事のメールはどこに行っても追いかけてきます。逃げ場がありません。そういうことから逃げようと思ったなら、地球を脱出して月か火星にでも行かなければ、仕事から逃れることができないのではないかと実感したくらいです。電子ネットワークというのは人を自由にし、そして労働から解放するというよりは、皮肉なことに、人の労働負荷を、より高めるといふ側面があると思います。私は普段、JRと地下鉄を使って通勤していますが、電車を待っているとき、老若男女を問わず、携帯電話を動かしている列が見られます。人の波がザーツと押し寄せるようなときでも、携帯電話を打ちながら歩いていく若い人が、前から人がきていることも、ほとんど意識せず、直進していくのです。前から来る人にヒヤツとさせられたり、階段を上り降りしながら打ったりしている様を見ると、本当に大きな事故になるのではないかと心配します。止まって打てばいいのではないかと思うのですが、それでは時間もつたいたないのでしょう。本当に、電気機器というものは、私たちを休ませるところか、日々駆り立てるような機能をもっているように思います。

## 電子ネットワークの効用

私はそういう電子機器がもつネガティブな面を言いたいわけではなく、ポジティブな効果があることが実証されていることも理解しています。最近面白いなと思った記事があります。アメリカの有名な調査機関の一つであるピュー・リサーチセンターが、フェイスブックを始めとするソーシャルネットワークキングサービスで、ユーザーの実態調査をいたしました。すると、どういう結果が出てきたか。普通、ブログを書き込んだり、フェイスブックをしたりする人は、何か閉じこもりがちというイメージもあるのですが、そうではないことがわかったのです。ソーシャルネットワークキングを活用している人たちは、それを全く利用しない人に比べてボランティア活動等に、より積極的に取り組む傾向が強いということが調査結果からわかりました。そういうものを利用して人間環境を広げて、ネットワークの上だけではない、実際の社会活動にも関与している。そういう新たな若者像が浮かびあがってきたわけです。これはボランティア活動というものが、ある程度日常生活に根ざしているアメリカでの話であって、同じことが日本で言えるかどうかはわかりません。しかしその可能性はあるということです。

もう一つ皆さんがよく知っている最近の例を挙げるならば、チュニジアで大きな政権転

覆が起こって大統領が逃げ出すような大きな変革が起こりましたが、このときも、ツイッターや携帯電話などの電子的なネットワークを通じたやりとりによって、それぞれの状況をシェアし自分たちの運動の方向性を、あるいはやり方を共有しながら反政府デモを行ったということが知られています。そういう道具がなければ成功しなかっただろうと言われています。電子ツールを最大限活用することによって、かつてであれば起こり得なかったような市民レベルでの連帯が起こり得るということも、最近、目の当たりにしたわけです。

ただ、こういう記事を読んでいると、ピュー・リサーチセンターの調査記事には識者のコメントも載っていますが、そのなかにバージニア大学のマレーイ・ミルナー教授が、「確かにオンライン上でのグループへの参加の動きは広がっているが、一方でインターネットは人びとの友情や友人関係を弱めている。つまり『親友』よりも『知り合い』をより多く生み出している」と指摘しています。これはわかるような気がします。人脈は広がって心の支えになるわけですが、知り合いはどんどん増えていこうとも、本当に腹を割って話せる親友が、そのなかにどれだけいるか自問自答したとき、どうだろうか。これは考えなければならぬ課題だろうと思います。

## 電子ネットワークの

### 拘束力

私が今日、e安息日という言葉掲げた最大の理由は、これから話すことです。今、サイバーネットワーク、インターネットの

世界のなかで深刻な問題になっているものが、いじめの問題です。これは日本でも数年前にそういうことをきっかけとした痛ましい事件が続けて起こりましたが、日本だけのことではなく、世界的な問題になっています。eブリング、サイバーブリングと言われていますが、サイバーないじめです。かつて、学校の教室でいじめがあったり、嫌なことがあったり、学校から家に帰る途中でいたずらをされたりといったことはあったと思います。しかし家に帰れば、そこは逃れの間だったわけです。家に帰ったら、学校の嫌なことから解放される。そしてひとときの安息を得、回復していく力を得て、また学校に行ける。そういうことができたわけです。ところが現代はそうはいきません。学校から帰ってきて家でパソコンを開ける、携帯をチェックして仲間同士が使う掲示板を見る。すると、自分に対する心ない誹謗中傷が書き込まれていることがあります。今や小学校の低学年から高校生に至るまで、ある特定の個人が攻撃されることがあると言われています。小学校の場合、裏掲示板としてあるとか。そんなものは見なければいいと言いかもしれませんが、友だちがどういいうことをやりとりしているのか気になってしょうがないの

です。友だち同士の会話にも入っていかなければならぬし、キャッチアップしなければ、と見てみると自分に対する悪口が書かれている。それがたまってくると行き場を失っていく。家に帰っても安息する場がないわけです。サイバーネットワークは地球上、ほぼ全体を覆っていますから、どこにいても逃げ場がないわけです。それは一方で私たちの自由を確保するために生み出されたものでありながら私たちの自由を強く縛る、皮肉な構造をもっていることがわかります。

こういふ現代社会のことを考えると、私たちは幼い子どもから働き盛りの大人に至るまで、電子ネットワークに身体・精神を雁字搦めにされているという現実を見なければなりません。目では見えない現実です。モーセの時代には考えられなかったような形での束縛というものが、私たちの社会にはあり得るということです。かつてモーセが、六日働いたら一日は休めということを強く命じた、そのことによつて人間は改めて自分の立ち位置を再確認するのです。そのことを毎週のようにやつて初めて、人間がどういふ存在であるのかということ、自分は生かされているのだということを感じと共に出すわけですが、私たちは現代世界のなかで、どうやったらそういう経験をできるのかという課題が、私のなかには常にあります。

## バーチャルとリアルの間

宗教は多かれ少なかれ、バーチャルとリアルの両方の世界に関わっています。バーチャルとリアルという言葉が聖書の世界に使えば、イエスが生きた時代にも、この問題はあったのです。メシアがきてほしいと強く待望する人たちがいました。ローマ帝国の圧政のなかで苦しむ人がおり、そこで救済を求める人たちがいたわけです。リアルな解決を求める人びと。ゼロータイ、熱心党の人たちですが、彼らにとってリアルな解決とは天の万軍がやってきて、ローマの軍隊を蹴散らし、最終的に自分たちを解放してくれることです。軍事的なメシアがやってきてローマ帝国を木っ端みじんにやっつけてくれる、というリアルな救世主を待望する人たちで、これは現実主義者です。他方、バーチャルな救済を求める人たちもいました。エッセネ派、クムラン教団の人たちですが、彼らにとって神の国を求める戦いは光と闇の戦いです。世の終わりがやってきて、最終的な戦いを経て、自分たちの魂が救済されていくという救済を求めた人たちもいたのです。リアルなメシアを求めた人たちもいれば、バーチャルな救済を求めた人たちもいました。

イエスはどうかであったのか。そのどちらにも傾かないわけです。リアルな救済をイエスに求めた人たちもいました。超越的な救済をイエスに求めた人たちもいました。ところが

両方の期待にイエスは応えなかったのです。イエスにとって神の国というのは、リアルでもバーチャルでもなく、福音書のなかでは印象的なことですが、ごくごく日常的な素材を使って、神の国とは何だということを話しています。イエスにとって神の国はカラシ種でした。一つ挙げると、こういう言い方があります。「天の国はカラシ種に似ている。人がこれをとって畑に蒔けば、どんな種よりも小さいのに、成長すると、どの野菜よりも大きくなる。空の鳥が来て枝に巣をつくるほどの木になる」。カラシ種は小さい種です。種ですから小さいのですが、蒔いて育つと、鳥がたくさん止まるくらい大きな木になる。神の国はカラシ種だとイエスは言うわけです。誰でも知っている小さな種ですが、そこから予期せぬ形で大きな木が生えていく。そういう小さな現実だけれども、現実を内側からつくるような形で、バーチャルな広がりがあるから生まれてくるわけです。イエスの譬え話ではリアルかバーチャルか、どちらが大事かは問題ではなく、そういうダイナミズム、リアルがバーチャルを生みだしていく、あるいはバーチャルななりにリアルを生み出すという、リアルとバーチャルの間を両方行き来する自由を存分に味わえることも一つの面白さではないかと思えます。

これは大事なポイントだと思います。現代は、イエスの譬え話をもつ、カラシ種とか、



土を掘って種を植えて、耕して育てて、というリアリティを失いつつあります。皆さん、指をどう使っていますか。お箸を持つとか、キーボードを叩くのにどれくらい指が酷使されているでしょうか。携帯電話のボタンを打つのにどれくらい親指が酷使されているでしょうか。そういったことを考えると、私たちの手や指は、キーボードを叩いたりすることにもっぱら使われる。私も嫌だと思いつつも嫌でもコンピュータの前に座ってキーボードを叩かないといけないわけです。おかしいと思いつつもそういう生活を強いられているところがあります。しかし私たちの指は本来、キーボードを叩くためだけにつくられているわけではありません。土を掘ることや、そういう感覚をどこかで取り戻す必要がある。私は趣味の一つに野菜づくりやガーデニングをしていますが、本当にそれが私にとっての安息になります。土をスコップで掘ると、軍手をはめていても指の間に土がはさまって土臭くなる。今はそういう感覚を失いつつある。種を植えて野菜を育てる、ちょっと強い風が吹けば倒れてしまう。色々な問題もありますが、そういうことが私にとっては大きな安息となり喜びともなっています。私が住んでいるところでは雪がどっさり降ります。京都でちらほらのときでも、家の周りでは七十センチ積もるくらい降る。陸の孤島と化すのですが、雪だるまをつくることもありますし、最近では巨大なかまくらをつくりました。これに

はテクニクがいります。立派なかまくらをつくると、かなり暖かい日が続いても何日ももちます。巨大な雪だるまをつくって中をくり抜くのです。厚い壁になって頑丈なものができて、中に大人が四、五人入れるくらいのもをつくることもできます。雪を触ると手は冷たくなって、かじかんでくるけれども、その感覚は何か忘れていたものを思い出させます。今の時代は、冬でもちよっと蛇口を捻れば温かい湯が出てきます。手にあかぎれができる経験はないと思います。私が小さかった時代、冬は、よく手にあかぎれができました。しもやけとか、そういうことも思い出しますが、皮膚感覚で自然に触れるということ、私たちは、どう取り戻すことができるか。そういう感覚をもちながら、電子ネットワークの海の中に飛び込んでいく。そして、よりリアルな身体的な経験との間で行き来していく。そういう自由闊達さというものを獲得していくことが、おそらく聖書の中に込められている意味ではないかと考えています。

これはイエスのメッセージを深読みしすぎていると言われるかもしれませんが、そこは大事だと思えます。新約聖書を読むときに、真面目な人は、「カラシ種とは直径五ミリくらいで、何日で発芽して……」と細かく書いてある立派な注解書を持ち出します。しかし、そういうものをいくら丁寧に読んでも限界があります。聖書にはカラシ種だけではなく、

植えるとか育てるとか農業にかかわるメタファ、譬え話がふんだんに出てきます。当時の人びとには、イエスのひと言を聞くだけで「ああ、そうだ」と膝を叩いて納得できるリアリティがあつたわけです。カラシ種をよく知っている。それが神の国なのですかという驚きが、そこにあるわけです。一体、この人の語ることは何なのだろうか、何か知らないけれど、そこに心惹かれて、イエスの言葉に耳を傾ける。イエスに従っていくわけです。私たちは、驚きのリアリティを経験に根ざしてつくっていかなければならないのですが、聖書を読んでいく際の前提となるような土に関する感覚とか、リアリティを欠いたまま、注解書だけで、頭の部分で聖書の字句を理解しようと思つても、しんどいところがあるのではないかと思ひます。

### アンブレラゲせよ

今日のテーマ、安息日というのは、私たちが日々働いていくなかで多くのことを忘れる危険を実際に教えてくれます。忙しさのあまり、大事なことをどんどん忘れていく。そして一番大事であるはずの私たちの造り主である神のことすら、人間は忘れかねないということをもーせは知っているわけです。だから六日働けば七日目には休みなさい。一切の仕事から手を引いて、あなたの造り主なる神のこと

を、もう一度覚えなさい、考えなさいということ語られているわけです。私たちは電子ネットワークの網の目からめとられています。それは私たちを日々忙しくさせます。それによって働いているような気になる、何か友だちをつくっているような気になる。しかし、私たちの本当の居場所はどこにあるのか。そのことを確かめるためには、一旦、アンプラグしていく必要があるわけです。その意識的なアンプラグをどうするか。放っておけば、色々なものからめ捕られていくわけですが、一旦、アンプラグした状態から自分の生活を、もう一度、全体から見直していく、プラグインされた生活とアンプラグされた生活と、異なる自分の間を自由に行き来することができる自由闊達さを、どう実現していくかということが、私が皆さんに考えていただきたいと思うことです。安息日によって創造の全体性を私たちに思い至らせるわけです。それと同時に身体の全体性として、私たちの指はキーボードを叩くためだけにあるわけではない、私たちの目はディスプレイに向かうためにあるわけではありません。私たちの身体は本来、もっと違う使い方ができるはずですよ。その可能性をもっているのに、普段の生活では、極めて限定的な使い方しかしていないというところに、ふと立ち止まって気づく必要があるということです。一旦、アンプラグして、そして私たちの身体の使い方には、もっと違う可能性があると普段の生活そのものを見

つめ直すなかで、私たちの生活の全体を、より豊かにしていく。そういうことを「安息日」という言葉のなかに思いをこめながら、今日はお話をさせていただきました。

二〇一一年一月二十六日 水曜チャペル・アワー「奨励」記録